小倉文庫
イ 16
1

毛利重能

算書

門イ16
號 1
卷

昭和二十七年
六月二十一日
受入

これ剃髪といふは夢天竺
へ渡りやうよりはじまる忍方
法をそなへ入るはじまり
山まうの百姿の食吳れもの
一生一切人ゐる乃初まは二人
ゐる取是をそ河二ようろう
ろむろしらのろ剃髪
ろろ ろろ八髪八陰無髪
八陽ゐ ごう陰陽よりろと
わうんや大唐りを陽減二
種髪といふあやろいろん
やうの郎よりむてやうり
髪川髪ろ ろひり

正実法とかうと僧乃仏乃
聞ばこと行きこと乃葉動く当也

割算用銭く次第

八算用数一　見一用数一
拾一倍ノ用数一　四十四割一
四十三割一　小一分拝一
糸割三　過て当ら三
須布割三　外物の算十二
金割算四　借銀借米四
米賣買六　拾地算七
普請割又　明見拝二

已上拾六ケ源小数又十又
八算ニ次第

二一　天作又
三一　逢二進一十
三二　三十一
四一　六十二
四二　逢三進一十
四三　二十二
又一　天作又
又二　七十二
又三　逢四進一十
又四　加一
加二
加三
加四

六一
六二
六三
六四
六八
七一
七二
七三
七四
七八
七六

逢五進一十
加下四
三十二
天作五
六十四
八十二
逢六進一十
加下三
加下六
四十二
八十八
七十一
八十四

八一
八二
八三
八四
八八
八六
八七

逢七進一十
加下二
加下四
加下六
天作八
六十二
七十四
八十六

九一
九二
九三
九四

逢八進一十
加下一
加下二
加下三
加下四

九八　加ト八
九六　加ト六
九七　加ト七
九八　加ト八

進九進一十

[illegible]

[illegible]

[illegible]

銭九一と仕ふ
十一人よりもれる時二人ずつ
十人より八十人を仕ふ
とも十一人と云時九一より銭
八十人より九十一人と云時九一より銭
ずつのうり十人の内うく
引ずつ一をのくるゆゑ二
十一を二を三十一を二を
十一を二をもて六十八十七
八をゝゝとも九のくりの内
銭なり

銭一倍一を仕者
引よりぐれ引時は銭一倍一と

いふ所の九八銭九一と仕時
より十二人よりもれる時二人ずつ
の十人をもて二人引ゆゑ時
ずつをもて仕時九十めの内
十人下へさげゝ八十用二
十めよりさて下の二十め
のうちて三人ずつ八人仕十
六人引ゆゑ時は二十の
銭も三十のうんを四十の
うんもみ十のうんを六十
のうん七十八十九十の銭と
いふとも九のくりて内の也
見一の銭と引ゆゑうんく

いつの又迄まるもつかせ

金子四十四割次第

一二　かゝ十二

二四　かゝ二十四

三六　かゝ三十六

四九　かゝ四

逢四十四進一十

銀子四十三割次第

一二　かゝ十四

二四　かゝ二十八

三六　かゝ四十二

四九　かゝ十三

逢四十三進一十

小一行之次第

一退六二又　二一二五

三一八七五　四二五

又三一二五　六三七五

七四　三七又　八天化又

九又　六二五　あれ小一行

といつの百六十の一行のわ

をなすよりいつの代をく

らのごとく紙幾なり

唐国をはじめよりあ

一唐国一行八百六十月わり日

なめ一行ちを二百又十めち

唐国行百行吹抜を何日

やめよかぶ紙をと時六匁のか
とうけやけ時日やめよかぶち
やけ外ちちトよ二又とを
やけ時何百何十匁とちを
やけ又日やめうの何百外あわ
ちをまき時唐用よ仕家や
ム河ハむ乃六匁ちくちを
やけ時唐用ふるり巳外
ちわトハ一六とうけやけ時
何百何十匁とちを
何百何十匁ちを
朝茶よ茶をそやき分
十二まよちを時八のちをそ

ちけやけ又十二まをうけよい
時八まくまるもやけあれ
き茶毎まくかくのくくは
二つよちる和八又乃ちをう
をやけ二つをうけうよ又
ちくくみちをちを
一三十又よちる和八匁のしを
をうけくくちを二トト又をう
やけ和八匁のちを
ちをくくのくくひて
ちの

須布の次第

一ぬのくくあまちうんつむぎこと

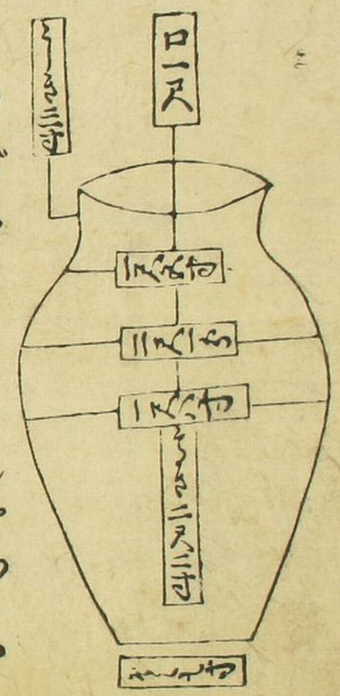
さるハ一さんの代をきゝ給へ
て級長戸辺命とゝいひ伝へ
中よりおきまきわゝ代
をひ一さんのるさ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一又伊弉諾ゝ
ゝたいゝものゝをゝよお
きうゝゝゝゝゝゝゝ
げ世の代ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ人二ゝ人蓬陽なゝ
ゝきゝいづゝのゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ世のあゝう
ゝて世の代ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ八尺
三百又十ゝゝゝゝゝゝゝゝ代弟
ゝ尺七百又十月ゝゝゝゝ
ゝゝ又百ゝ又ゝゝゝゝゝゝ
又百三十ゝゝゝゝゝゝゝゝ
尺七百又十月をゝひゝ三
六二又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月八尺三百又十ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
六ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
三十又ゝの代ゝゝ

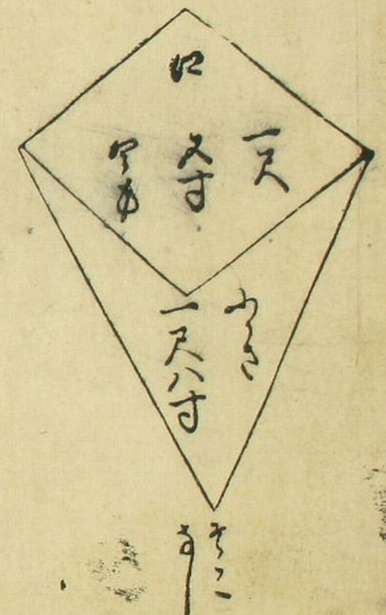
物よ弁をうと入術
一京弁ハ二寸四方ゆかり
二寸ゑ分わりとうとう
あよとうきをうきをうきうけ
六二ゑわり元一寸四方の物
六十二寸なるなり
一四うくうわよ弁うす合し
ハうけうこのすあよとうきう
けうきうけうきうて十六とか
を弁うをうたなり
一九うきあハうしわうこのすあ
よ行うきうけうきうかけ十六
とうけうて八とうけうは術

とうとうずおなるなり
一四けハうちのうきうけうきう
うこのけうわうこの一つよおう
合ゑ二つようちとうこの筆
あよおうきうけうきうてうさ
うけ十六とうけ八とうけう
は術弁うすまよりやせ
一三角ハ一寸のすあよ行
うけうきうけ十六をうを
は十三とうを弁うすよな
つとうこうこうきいなり
一清ぐのかハうこのどうこう
こうつうこうこうをんとれ

やはらかなるうちつぶのごとく


口一尺
ふち三寸
ふくらかの
ふくらかの
ふくらかの

一



たとへば一尺八寸あるものを
うけてみるに一尺八寸をうけ
十六をうけさて一ツとる時
二九六すなわち三三
七八三よりこれを加へ
よりて四二分一本八合九
夕一を入
一寸ゝきあるものゝ

つまるこれのかけ算と同おなじ
しかたなりかけは八をうけ
十六四分一ずつなるゆえ
一寸のごとくきわまるときは
あるいはよりをとをたくまの
まりなる人あり四のこれある
てこれを四一二分よりこれ
一尺二寸八分四厘をうけ
同寸ゝ一二分一ずつあるゆえ
二寸をうけて十六をうけ
まもとうずる二分一本二合
八夕一つをうけ
一寸のごとくきわまる

一尺ありしを八一寸四分四
のこりしかくしてかくの百分
の時は又十よ位なりわ
ざ為りまうまうまうまうまうの時
ざ一寸四分四の和百四十九
こ分ここもこ九来わりわくの
こくくたりこ
一こまのこくわたくしの寸一尺
わまこでまりこ三尺一寸六
分わりこ二つよこ
つまこ又寸四りまりこ三尺一寸
六分二つよりよりこ一尺又寸八
分わりこれよりの又寸とり

を七九よりたりこよこ
てまこくわよ七九とり
八とうけてもこ
一金こ金こよりこの分
一金こ三百八十八こわりこの
金のこち百三十二こ四十
みこのこくこのこ四十又
まこち二枚九こ三三こよ
こる 二百九こ 七十三ここの
くこいたり 七十三こよこ
二枚八こ六三こよりこ
四十七こ 又十七このこ
いこり 又十七こよこり八こ

十二

一ヲ又よりたしかに三ヶ合
六枚六匁二ヶ八わりたの分
三百八十八匁とりかへ
大判一枚より外又十八匁六分
うへよわるかたち
金子銀うへかへ時八匁うへの
九匁うへとりて六金一匁より銀
子八匁又九匁のうち金を
とき八匁うへ乃時八八とり
九匁うへの時八九とりかへ
時銀目よりなりし
銀よりさうるよりきう
ねとうへかへ時銀引くとき

二ヶとりて時わりきうよ
八をとりかへ時より銀ねよ
なりかへ一ヶとりて八九を
とり二ヶとりて八七をとり
かへ
一ヶ〆銀引とり時二ヶとり
とりて時八十二よりとる三ヶ
とる八十三よりとるとり
とりうとうとる
借銀利足の法
一ヶ月ヶとりて六百ヶ一ヶ月
よ銀子一匁ての利とる
銀子一ヶ二文とりて

百あまり一千月より銭百あまり
二百つゝの利をとり二年と銭
月のうちをとりけさて銭
よそのもをとりけせ
一四年八月をわるかさぶと一
年分のうちとうりやしこ
まてこしもわるとて時ハな
おきこをとりけし時ハ
利ぶんをもやはりよろ
時も一三をとりけやはり年
のうちをとりくのとく年
のうちをとりけやしうり
一のもとりくへハ十人

わるで百あつりちるも
九百月をそのうちあんハ
いでをとりくのとく
月より百あまり八百つゝの利
をとりくすくやはり
九月の利七十二百の利
はり分のうちよわるとハ
時一より九までをとり合年
又わりはり十あまりて七十二
百をとり時一分六つ人の
月よりのうちをとりて組人分
ばきかで利をくやとく
わるやハ

一大工さく手ごうりうの手間
といつもよりの大工の人中
の大工五人下の大工五人
ありし銀二匁五分くらい時
二ごりさごりの作事方
ごとに費め一八百世三匁五分
一六百九十四匁五分四厘
ちまたを三日合二匁六百
世七匁七分四厘　三匁四
とおの合すてりうし時
まよりの大工一匁百八十六
匁八分一厘　中の大工五人九
百八十九匁四分りり　下の大工

八百世四匁一分七厘六毛
大二ごりまし
く銀ちちちの
ちちちり

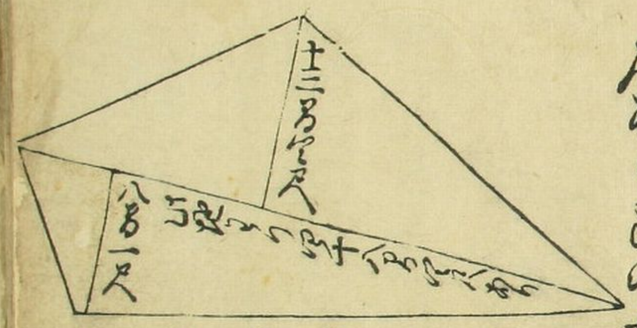
米のりうい九作事
一銀十匁より米三斗五升
いつ時より米百五十三石五
斗わりしちの
まりちゃは時銀四匁三
百八十五匁七分一厘まりり
ちは　同銀十匁より三斗五
米三人の時は銀三匁五百七
十五匁ありしちの作事

四ツ八分の米四ツよりとを
中ひ米百ゝ又五石一斗二升
又合よりとの内どありても
かくのごとくあるの八米一石
を張の十めとえをへて
一石よりとて二十八ゝ
時ゝ三ゝ又百七十ゝ
ありとめるひ内ごとくいつ八
ゝ八ゝとりとる時米百ゝ
石六斗七升八合六ゝよ
ゝ中ひとくのごとくもて
一同じく一石ゝ八ゝの時米
三百ゝ十六ゝ内ゝ米ありひ

とりとひ内ごとくいつ八
とりとひ中ひ時張九ゝ百
八十二ゝよりとりとひ大ゝを
りかくのごとく
一石どの八ゝ判ゝ
りとりとへど一ゝ
あり米といつ八ゝ
ゝとりとりとき二
中ひられとのごとくもて
一ゝとりとりとて八ゝ
米とりときとの
張のとりとりとゝ
きひとり

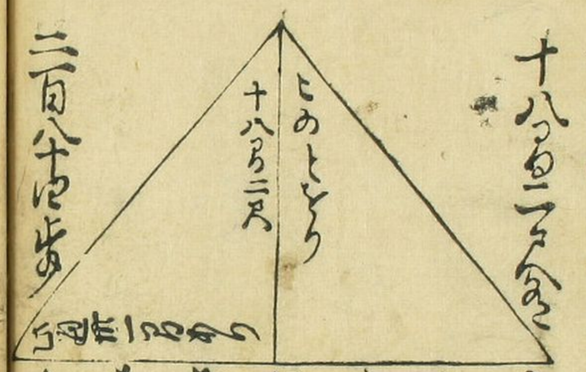
拾地の法

一ちうこうの弓あるよりなきを
ひきてこうこうちうこうの
時拾間つゝ立てせて後せてより
下ハこうこうを拾十
歩拾歩とらへたり
一まうこう四中のさしたう
あるよりおさうをさして七九を
ひけば拾歩あるよりさて
九のこくよりこうこうを三よりヤ
拾間拾間つゝせてあるヤハ
一同くまうこう田を拾歩
拾歩こうこう行る時こうこ

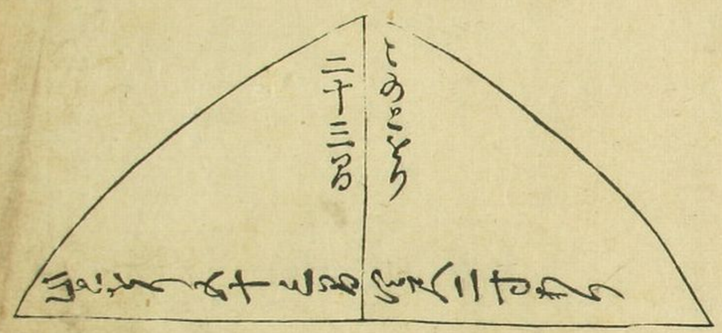


こうの弓をとるときみて
みこうわうこうのこうより七九
をひくこうこうのこうとるより
こうこうひけば
一このこうこうて二つ合拾一歩又
九わうこの拾一歩より六のこ
ふをとりヤ
ひ拾一三一よる
ひと二つよりこう
六又ふよりこうさ
てこうこうさ四十八
歩より六のこふ
をとる時二九

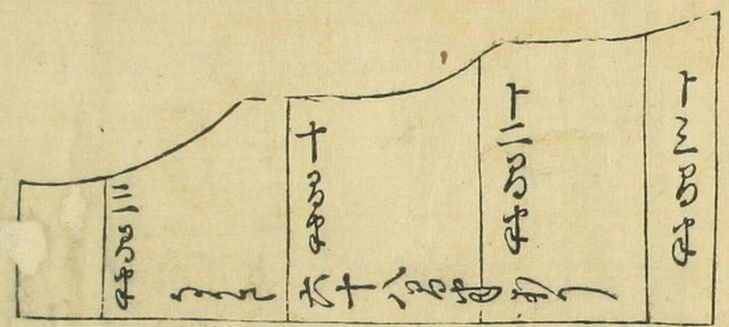
二よりろ時六寸と為す時
一九一二六よりする時六りそて二
分ろりやひ時又百三十一
歩二八ろりこるくろる時
一坪七四九一歩よ数也見也
一ちれろこぐくらふひ中の
十八ろ五二ろ分
十八るよ六をけ二よ数也
ちをこ二より
足や時又よ
なるさてうぐ
さこ十一ろを
け一七ふり



なろ六りくくろるや時よ
一六六よなろや也
うろこぐくろもるてぐろく
のくくろるれろ十三ろ
ゆろ人二すあ
ゆろ人二す六の
ふすくくる
毎時又十三
ろ七よなり
やひこ与一
ちて三ろ二
八やひちれ十
又よろり時こ



十又弓八よりやう
ひさて二十三弓をう
けやうの時八百二十三
歩ほどなりやはこな
てまろ時ハ二うん七
四ハ十三歩やうまりう
やはくのこるをたす
ほ
一ぢくのぶくるる四あ
ほくろくろまけて
んをうち一つよりをき
くのうどをかどよみう
ほまれおをさ金てやす十



弓ありみをつ
よりす十弓ま
まるかどさ云
十八弓やまをう
をを百八十ま
歩ありさうん
まり二ぢ二せ
二十又歩あり
いろくのまり
ほをありいづ
まをうやうよろ
うりどまろひさ入
うまろまるまーや

[illegible]せんすり

[illegible]のたぐ

[illegible]十[illegible]そこ八[illegible]

一つよ　さ十八[illegible]二つり

さりのるあり[illegible]さ六を

[illegible]時又十はつがわり

[illegible]さ六百七十三[illegible]わ

[illegible]又十はつがをとしやゝ時

三万六千三百四十二つか

わり来こり二百又十七万

二千二百[illegible]わりたつかり

つゝやゝいつかをあき来

こりて時一万[illegible]

つゝて百四十一つが二千八百

七千六百[illegible]あよわこりやゝ[illegible]

来こり一人づゝの分

一中数　四十三万六千[illegible]

二中数　六十八万[illegible]

三中数　二十万三千[illegible]

四中数　又十二万[illegible]

五中数　三十二万又千[illegible]

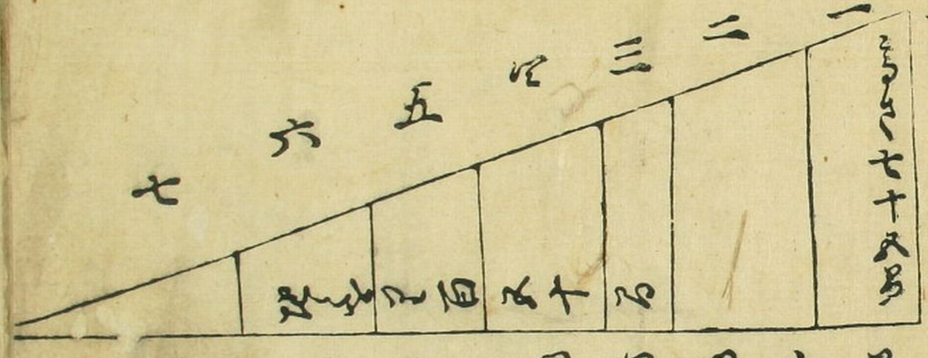
六中数　三十万七百[illegible]

七中数　十万七千又百[illegible]

[illegible]へたのめわすりて

つゝやゝ

一間とこりわこりやゝたもの



ちうり八六人一号
す一号ちうり
ひろさ七十五号
号一尺八寸二分
分あり
同世三号五尺八分
同八号の寸七分
同二十四号三尺
六寸九分ちう
同世号一尺の寸二分
同世九号五寸九分
同世五号三尺九
寸八分のちう
さうのちう

ちうと八号を一つ
して又二つよりみる
なりやはひろさ六号をけ
四十八つぶよりなりやはひ一人
よりちうはやはひ一人
あたりそなる中よりおき
四十八ちうしうしはそ
人のちうぶをもしかく
はちうちうのり
一つちうちうなりつ
ちうつぶよりちうはちうと
のちうと五よりおきうけちう
さうけつぶよりなりやはひ

のぼくたしんとうとい
たのうものかんとうとい
てきぞくまるとうとみ
しくぐしちくさきのこ
なくとうとうあとう
まつくでんなり
一きんきしゅうとうとい
とくかくのごく

まうのうを
人をきよう
対中のふ
ちうをを
ひきわく

やはれはうとうふ
つきたう美とわいろい
ぶあり

町のこやしれば
一むうひつきのとうよ一
よのあり
みしくまとてまへとべう
いるとのつくとあてこと
き一人二寸ぶあるかぐのよの
なしゆひよ尺のうひとうち
それてさに一よのあなを
ちうされきこうひし
ぶるまうとうとうとうぶ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

けきこくぶくしゅよりけんぶつ
初学篇山海経讃
ちかのよ市ぶ糸の新しゃ
仁和寺中さいはること
くしたりたるもんそん
のふれかくうれけ手
ちの沈酒二つのところ重
とまくくうぜいるよ
なしぬりの筆ものとりの
平よ沈ゆよりとさんも
筆ちしくいつふいぶゆ
さも用すよ養のぐくまり
ちさんかり筆糸清ふり

そくまのぶくくなる
ちさんかいづまもうり
のさんまめまくけて
いつも重紙よしたぐ
しくでんあり装用筆
動よりくるもの士農
工商琴碁書画ふさ
やーちづのめ八ぶーぬの
くよくくうきぐさんう
りくくくあんや
ふしたりなをしくく
くめくくもくるくく掛
博雲義斉郎百掛

人今京洛よりもしるべ
爲のてをかくてうつすも
ものなり

寛永八年初冬日重能

山口重能

加賀文庫藏書

日本最初の印刷
算術書と呼ばれる
もの。初版は元和八
年、この書は寛永
八年の再版である。

昭和十四年六月

小倉金之助